

2021年1月3日 久宝教会 新年礼拝（降誕節第2主日礼拝）

メッセージ「帰るべき故郷」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 2章13-23節

明けましておめでとうございます。コロナ禍での年末年始を、皆様はどのようにお過ごしになられているのでしょうか。新型コロナウイルスの感染者数が増え続けており、首都圏では再び「緊急事態宣言」を出してほしいと知事たちが言っています。大阪府でもこの年末年始は「レッドステージ」で「ステイホーム」とか、よく分からないカタカナ語が並べられた年末年始でした。

そのために例年の風物詩のような、いわゆる故郷へ帰る「帰省ラッシュ」も見られなかったようです。故郷を離れて都市部で生活する人たちが、お正月を故郷で親兄弟たちと一緒に過ごそうとして、帰省ラッシュが起きるわけですが、それが無かったというのは、一体いつ以来だったのでしょうか。それこそ道路や鉄道などの交通網の整備と相まって、地方から都市への人々の移動が始まって以来、初めてだったかもしれません。ちょうど一年前、中国の武漢で新型コロナウイルスによる感染が見つかったという報道を聞いた時には、まさか一年後に世界がこのような状況になるとは予想もしていませんでした。

もう、少し古い話題になってしまいますが、昨年2020年の一年間を表わす「今年の漢字」というのが、先月発表されました。私自身は「コロナ禍」の「禍（まが／わざわい）」という字ではないかと予想していましたが、結果は1位が「密」、2位3位が「禍」と「病」でした。「密閉・密集・密接」の「三密」にならないようにと、どこでも呼びかけられ、保育園や学校でも行事や生活が見直されました。しかし、同時に思わされたのは、子どもたちは「密」を避けては成長できないということでもありました。他人に感染させないため、自分が感染しないために、マスクをするのが当たり前になり、マスクを外すのは家の中だけ、家族との間でだけ、となっている今、改めてそんなマスクをつけない人との親密・密接な関係性の中でこそ、育

まれる大切なものがあるのではないかと思わされています。

「故郷」という言葉を聞くと、皆様はどのようなものを連想されるでしょうか。今年にはコロナで年末年始に故郷に帰省することが出来なかった。そのために、インターネットを使ったビデオ会議で、親戚一同が顔を合わせたという話も、報じられていました。仕事中心の都市部での生活から、故郷に一時帰省して、気の置けない身内と一緒にのんびり過ごして羽を伸ばすというのは、今の言葉で言い換えるならば「マスクを外して、呼吸ができる」「素顔のままで会話や食事ができる」ということと同じだったのではないのでしょうか。

私たちは一人一人、時と場所に合わせて服を着替えたりするように、様々な場面や役割に合わせて自分の振る舞いも変わっているのではないかと思います。例えば、家庭での自分、職場での自分、友人との間での自分など…。それぞれの所で自分の言動が異なっているのは、それぞれの所に合わせてマスクをしているからなのだとすれば、そのマスクを外して、素顔でいられるのは、いつ、どこで、なのでしょう。自分が素顔でいられる場所を故郷と呼ぶならば、私たちは果たしてその故郷を持っているのでしょうか。

今回の聖書のお話は、クリスマスに生まれたイエス様の所に、東方から博士たちが贈り物を持ってやって来たというお話（マタイ2：1-12）の続きのお話でした。東方で救い主誕生の星の知らせを見た星占いの占い師たちは、遠路はるばる砂漠を越えてエルサレムへやって来て、まず当時のユダヤを支配していたヘロデ王を訪ねて、救い主がどこに生まれたかを聞きました。ヘロデ王は祭司长や律法学者たちを集めて、救い主が生まれたのはベツレヘムだと調べさせました。それから東方から来た占い師たちにベツレヘムで救い主を見つけたら、自分にも教えてくれるように伝えて、彼らを送り出しました。それは「私も行って拝むから」とのことでしたが、内心は自身の王位を脅かすかもしれないその幼子を始末しておこうという魂胆だったわけです。しかし、占い師たちはイエス様に会い、贈り物を献げた後、ヘロデの所には戻らず、別の道を通って東方へと帰って行きました。

それを知ったヘロデ王は怒りました、16節にある通りです。「ヘロデは博

士たちにだまされたと知って、激しく怒った。そして、人を送り、博士たちから確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいる二歳以下の男の子を、一人残らず殺した」。とても残酷な幼児虐殺です。しかし、このようなことは実際には、歴史的には行われていなかったと考えられています。もしも実際に行われていたとしたら、歴史的な事件として、ヘロデ王の治世の記事として、様々な記録に残されているはずですが、この事件はこの『マタイによる福音書』以外には記事がありません。そのために、マタイの創作だと考えられています。

では、なぜマタイはわざわざこのような記事を書いたのでしょうか。それは古代イスラエルをエジプトから引き連れて解放した古代のリーダーであるモーセになぞらえて、イエス様もモーセのようなリーダーであり、人間モーセを越える救い主だったという理解があったからでした。それこそヘロデの手から逃げるためには、エジプト以外の場所に逃げることもできたと思いますが、「エジプトに逃げるように」と天使がヨセフに告げたのも、15節にある通り「私は、エジプトから私の子を呼び出した」（ホセア 11：1）というヘブライ語聖書の預言が成就したとするためでした。マタイはその福音書全体を通して、ヘブライ語聖書の預言の数々が、イエス・キリストによって実現した。イエス・キリストこそが預言の成就であるということを、何度も何度も強調しています。

その後、ヘロデ王は亡くなり（紀元前4年）、その息子アルケラオの治世になってから、ヨセフはエジプトから、イエス様とその母マリアを連れてイスラエルへと戻って来たとあります。そして今度はベツレヘムではなく、ナザレに住みました。イエス様がどこに生まれて、幼少期をどこで過ごしたかは、実際には分かりません。『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』でも、内容は食い違っています。ですが、イエス様がナザレという小さな村で暮らしていて、「ナザレのイエス」と呼ばれていたということは、4つの福音書全てに共通しており、事実だったのだらうと思われています。

イエス様を連れたヨセフたち一家のエジプトへの避難、逃避行が、たとえ歴史的な事実ではなかったとしても、だからと言って、ここに書かれて

いる記事が全く無意味ということではありません。異国の地に難民として亡命していくヨセフ一家の様子は、古くからたくさん絵にも描かれて来ました。神様の子どもとして、王様の中の王様として、お城の中に生まれて、何不自由なく暮らしてもおかしくないにも拘わらず、イエス様は粗末な家畜小屋に生まれて、生後間もなく虐殺されるかもしれない危険にさらされ、一家で遠い異国の地での難民生活を余儀なくされました。人としてどん底の窮乏生活を経験されていた……。そこに古来、人々は自分たちの生活の苦しさを、身をもって知っていてくれて、共にいて下さっている神様を感じ、慰められ、励まされて来たのだと思います。

このエジプトへの避難が、マタイの創作であったとしても、生まれたばかりの乳飲み子であったイエス様を抱えたまだ若かったヨセフとマリア夫婦が、異国エジプトでどのような難民生活を送っていたかを想像することは、決して無駄ではないと思われます。お金も無く仕事も無く、着の身着のまま遠くエジプトまで逃れて来た。いつ故郷のナザレへ帰ることが出来るのかも分からない。けれどもいつか故郷に戻れる日が来ることを信じて、諦めないで、今を生きる……。自分たちには「帰るべき故郷がある」という信念が、彼らを支えたのかもしれない。

18節には戦争によって故郷を追われ、子どもを失った母親たちの嘆きの歌が引用されていますが、この嘆きは現代もなお続いています。パレスチナ地方での武力衝突は依然として続いていて、多くの人々の血が流されています。家や故郷を失い、難民となる人々も増えています。その他、世界各地で格差と差別、貧困もますます深刻化して来ているように感じています。

そんな現代社会において、私たちが「帰るべき故郷」「帰ることのできる故郷」は、どこにあるのでしょうか。マスクを外して大きく深呼吸できる場所、飾らずにありのままの自分でいられる場所、相手。たとえ今は身近になくても、帰ることができなくても、私たちには一人一人、そのような帰るべき故郷がある。そして、そこで私たちの名前を呼んで下さっている方がいる。そのことを心に留めて、この年もまた神様のお守りの中、私たちは歩みを進めて行きます。